The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	いれずみ(タトゥー・彫り物)の経験の実態および経験者の特徴
Author(s)	鈴木, 公啓; 大久保, 智生
Citation	対人社会心理学研究. 2018, 18, p. 27-34
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70538
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

いれずみ(タトゥー・彫り物)の経験の実態および経験者の特徴

鈴木　公啓(東京未来大学)
大久保　智生(香川大学)

本研究は、現代日本において、いれずみ(タトゥー・彫り物)の経験の実態を明らかにするとともに、いれずみに関連する諸内容について扱い、経験者と未経験者の比較から、経験者の特徴について明らかにすることを目的とした。具体的には、どのくらいの人が経験しているのか、どの程度興味がもたれているのか、どの程度受容されているのか、どのくらい周囲の経験者がいるのか、そして、どの程度いれずみの特徴を知っているのかについて扱った。約 6,500 名を対象に実態調査を行った。また、そこで抽出されたいれずみ経験者に加え 90 名のいれずみ経験者を対象とし、非経験者と対比して、いれずみに関連する諸内容についての検討を行った。その結果、いれずみ経験者は少ないことが示された。また、いれずみを入れる者は、いれずみが身体に及ぼす影響についてはそれなりに理解していた。しかし、周囲にいれずみ経験者を多いと思っているからか、いれずみを社会から受容されていると思い、そして、対人的対社会的な制約を意識せずに、いれずみという装いを選択していることが示唆された。

キーワード：いれずみ(タトゥー・彫り物)、装い(身体装飾・身体変工)、実態、態度、知識

問題

近年、いわゆる「いれずみ」に対する世間の興味・関心が高まっている。公務員を対象とした、いれずみの調査とそれに係わる裁判、彫り師の医師法違反容疑による逮捕と法廷闘争、公共の入浴施設における入浴制限の是非に関する議論などのニュースも記憶に新しい。メディアに登場する人物のいれずみについて、口の端に上ることもある。

このような状況ではあるが、現在の日本においていれずみを入れる人はどのような人なのであろうか、また、いれずみを入れている人と入れていない人において、いれずみのとらえ方は異なるのであろうか。装いの 1 つであるいれずみは、アンタッチャブルと見なされることもあるためか、それを対象とした研究はきわめて少ない。日本におけるいれずみの歴史や現状については、文化人類学的観点から詳細にまとめられている(e.g., 山本, 2005, 2016)。しかし、一般の人を対象としたいれずみに対する態度などについての調査、また、いれずみを入れている人を対象としたインタビューなどは、いくつか行われているが、いれずみを入れていない人との対比により、いれずみを入れている人の特徴を検討した研究は行われていない。そのため、いれずみを入れる背景にある心理については、十分には明確にされていない。

いれずみの定義および歴史

いれずみを表す用語は数多く存在し、入れ墨(入墨・いれずみ・イレズミ)、彫り物、刺青、(倶利伽羅)紋々、がまん、入黒子(いれぼくろ)、タトゥー、黥、文身などがあり、それぞれ意味するものや歴史的背景が異なっている。本論では、日本伝統の図柄のものである和彫りを「彫り物」、それ以外の洋彫りを「タトゥー」とし、そして、両者をあわせたものを「いれずみ」と表記することとする。

いれずみは、文身の 1 つであり、文身は身体変工の 1 つである。身体変工とは、直接身体に加工を行う（身体損傷や身体変形をともなう)身体装飾のことであり、ピアッシングや、リップ・プレートなどの身体穿孔、いれずみ、美容整形、痩身、ボディビルディング、お歯黒、纏足、ブレストアイロニング、割礼(女性性器加工)、去勢、首の伸長、頭蓋変形、インプランティング、尖歯、削歯、抜歯、哀悼傷身など多岐にわたる。用いられる時代や文化が限定されるものも多く、現代の日本においては一般的と見なされないものも多い。なお、整髪・洗髪、爪切り、脱毛、髭剃りなども身体変工に含まれる。

そして、身体変工の 1 つである文身は、刺痕文身と瘢痕文身の 2 種類があり、いれずみは刺痕文身に該当する。刺痕文身は、傷つけた身体の傷に色素を入れ着色して模様を描く装いのことである。尖らせた用具を用いた刺突による方法と、黒曜石などにより細かい切り傷をつける方法の 2 つの方法がある。現代日本のいれずみは、刺突によるものである。

いれずみの目的・動機としては、元々は、民族あるいは男女の標徴、階級の標徴、勇者の標徴、婚期を示す女子の標徴、宗教的な理由、装飾や化粧、医療、刑罰、呪術、性的なものなどが存在したとされている(吉岡, 1996)。そして、基本的には同じ集団に所属する人は,その背景にある価値観や意味などを共有していたが、現在は、施術理由や図柄の選択が、社会によるものではなく個人的なものとなっており(山本, 2016)、個人のファッションの 1 つとして選択されるようになってきている。

日本においては、いれずみは縄文時代には行われていたと考えられている。そして、江戸時代に流行し、その

頃は、いれずみを入れた人に対して格好よいという評価が行われていたようである(田中, 1940)。しかし、その後、明治政府に禁止されてアンダーグラウンドなものとなった。そして、昭和になり、任侠映画・ヤクザ映画の影響により、今の「入れ墨 ＝ やくざ」というイメージが形成されていった(山本, 2016)。現在は、一般にはネガティブなイメージがありつつも、おしゃれの一環として採用している者がいる状況にあるといえる。このズレが、さまざまな社会的問題等を生じさせているといえる。

いれずみの経験の実態

いれずみを経験している人はどのくらいいるのであろうか。関東弁護士会連合会が 2014 年に 1,000 名の成人男女を対象に行った調査によると(関東弁護士会連合会, 2014)いれずみを入れている者の割合は、1.6%とのことである。なお、いれずみを入れたいと思った者(5 件法で「強く思う」、「どちらかというと思う」と回答した者)は 3%と報告されている。また、大阪市公式ホームページ(大阪市, 2015)によると、大阪市が公務員 33,537 名を対象に行った調査において、回答した職員 33,507 名のうち、113 名(0.34%)がいれずみを入れていたことが報告されている。20 代から 40 代の男女 350 名を対象とした、東京イセアクリニック(2017)においては、いれずみの経験者が 3.1%と報告されている。

なお、アメリカ合衆国においては、約 2000 人を対象とした調査により、2010 年調査時点で 18 歳から 29 歳の若者(Millennials：1981 年から 1991 年生まれ)におけるタトゥーの経験割合は 38%であり、耳たぶ以外のピアス(23%)よりもその割合が大きいこと、そして、45 歳以下と 46 歳以上では傾向が異なり、46 歳以上は経験割合が低い(46-64 歳で 15%、65 歳以上で 6%)ことが報告されている(Pew research center, 2010)。また、アメリカ合衆国における 18 歳から 50 歳の 500 人を対象とした調査を行った Laumann & Derick (2006)は、男性の 26%、女性の 22%がタトゥーをしており、収入が低いほど、また、若いほど入れている者が多いこと、入れている人は懲役を受ける期間が長く、脱法薬物をより用い、学歴も低いことを示している。そして、The Harris Poll (2016)も約 2200 人の成人を対象に実施した調査から、タトゥーの経験割合が 29%であること、若いほど経験していることを示している。このように、アメリカ合衆国に比べると、日本におけるいれずみの経験割合は大きいとはいえない。しかし、装いは個人と社会とのすりあわせの結果、採用され評価されるものであり、いれずみの背景にある心理を理解するには、少なくとも日本においてどのように人々に位置づけられ、人々にどのようなイメージを有されているかを考慮する必要がある。

いれずみの受容

それでは、現在の日本では、いれずみという装いは、どのようにとらえられているのであろうか。いれずみが多少はファッションの一部になってきているとはいえ、一般にはいれずみは許容されておらず、いれずみに対するイメージは決してよいものとは言い難いことが、いくつかの調査によって示されている。例えば、田中・水津・大久保・鈴木(2015)により、入れる範囲が大きいほど許容されなくなること、そして、年齢層が上であるほど許容されていないことが示されている。また、彫り物はタトゥーに比べ、許容できると答える者の割合が小さいことなども明らかにされている。イメージについては、「精神的高揚」、「反抗心」、「自己呈示」、「拒否感」といったイメージが有され、ポジティブなイメージとネガティブなイメージの両方が存在することも示されている。また、関東弁護士会連合会(2014)により、いれずみをしている人に対してどう思うかについて、「全くかまわない」と「かまわない」があわせて 15.3%と少なく、「入れ墨やタトゥーと聞いて連想するもの(複数回答)」については、「アウトロー」が 55.7%、「犯罪」が 47.5%、それに対して、「芸術・祭・ファッション」と回答したのが 24.7%であることが示されている。また、いれずみを入れた人を見た時にどのように感じたかについては、最も多いのが「不快」で 51.1%、次が「怖い」で 36.6%であり、ポジティブな内容の「個性的(格好よい・お洒落)」が 11.2%であることに比べ、ネガティブな内容が大きな割合であることも示されている。さらに、家族や友人などがいれずみを入れることを許容しないとする者が多いことなども示されている。東京イセアクリニック(2017)においても、いれずみを入れている人の印象として最も多いのが「怖い(反社会的)」で 44.0%であること、自分の子供がいれずみを入れることについては 8 割が反対すると回答したことが報告されている。このように、ポジティブなイメージも一部には有されるが、基本的にはネガティブなイメージが主に有されていること、そして許容されていないことが明らかにされている。

なお、アメリカ合衆国においても、タトゥーがそれほど許容されていないことが明らかにされている。例えば、The Harris Poll (2016)により、タトゥーをしている人に対するイメージとして、反抗的というイメージを有する者が 40%と、最も多いことが示されている。そして、子供がタトゥーを入れることに対しては、37%の人が許さないと回答し、親の年齢が高いほどその禁止の割合が大きいことなども報告されている。このように、必ずしもアメリカ合衆国においても全面的に許容されているわけではない。日本においては、一般的には、メディアを通して海外のスポーツ選手や歌手など、特定の職業の人たちを「外国人」として目にすることが多いため、海外のいれずみの許容度

に対する認識に偏りが生じている可能性は高い。

上述のような、いれずみに対するネガティブなイメージが、いれずみを入れている人に対する偏見などを生じさせている現状が確認される。例えば、観光庁(2015)が全国のホテルや旅館約3800件を対象に行った調査(「入れ墨(タトゥー)がある方に対する入浴可否のアンケート結果」。回答は581施設)によると[1]、いれずみを入れた者とのトラブルがあったか否かについては、「ない」が 78.3%、「ある」が 18.6%であったのに対し、いれずみを入れた人に関する苦情があったかについては、「ない」が 51.8%、「ある」が 47.2%であることが報告されている。つまり、トラブルの割合に対して苦情の割合が多い。また、先の関東弁護士会連合会(2014)の調査において、いれずみを入れた人から被害にあったことがあるのは 4.5%であるのに対し、法律で規制した方がよいとする者(5 件法で「強く規制すべきである」、「規制はあってもよい」)は 33.9%である。このように、実際のトラブルが無くても、いれずみを入れている者に対する苦情や規制の必要性が述べられている現状がある。山本(2016)が言及しているように、いれずみに対するネガティブなイメージや態度が、苦情の申し入れにつながっている可能性がある。これは逆に、いれずみに対してネガティブな態度を有する人が多いことを示唆するものとなろう。このように、現在の日本では、いれずみにはネガティブイなメージが付随しており、それがいれずみを入れている人に対する態度に影響しているといえる。

とはいえ、いれずみを含めあらゆる装いが、社会の側と個人の側とのすりあわせの結果として評価され、そして採用されていくものである以上、今後もネガティブなイメージが続くとは限らない。時代によって評価がかわり、一般的な装いとして採用されることになる可能性はある。

本研究の目的

本研究は、現代日本において、いれずみ(タトゥー・彫り物)の経験の実態を明らかにするとともに、いれずみに関連する諸内容について、経験者と未経験者の比較から、経験者の特徴について明らかにすることを目的する。具体的には、どのくらいの人が経験しているのか、どの程度興味が持たれているのか、どの程度受容されているのか、どのくらい周囲の経験者がいるのか、そして、どの程度いれずみの特徴を知っているのかについて扱う。そして、その際、タトゥーまたは彫り物の経験者と非経験者との対比を行いつつ、明らかにしていく。これまで、タトゥー経験者と彫り物経験者の対比による検討は行われておらず、日本における両者の特徴について、その差異から浮き彫りにすることが期待される。今回得られた知見は、社会においていれずみがどのように位置づけられているのか、そして、アンタッチャブルとされてきたいれずみと今後どのように社会が向き合うかについての理解に寄与すると考えられる。

方法

対象および手続き

対象 1: web 調査により、日本全国に居住する 20 代から 50 代の男性および女性を対象とし、各年齢層(10 歳刻み)に約 900 人を割り付けて実施した。回答拒否や無効回答等[2]を除いた男性 3079 名および女性 3359 名の計 6438 名(平均年齢 40.54 歳、 SD = 10.78)のデータを分析に使用した。2016 年 5 月から 6 月に調査会社を介して実施した。なお、回答者にはポイントが付与された。

対象 2:第 2 著者の知人を通して、いれずみを入れている人(タトゥーは 25 名、彫り物は 65 名)を対象として直接配布し実施した。男性 67 名、女性 23 名の計 90 名(平均年齢 32.73 歳、 SD = 7.66)であった。2015 年 11 月～2016 年 6 月に実施した。なお、回答者には謝礼を渡した。

調査内容

以下の内容について尋ねた。

経験と種類 タトゥーと彫り物の経験や種類について尋ねた。経験があるものを選択するように求めた。なお、「タトゥー」は洋彫り(和彫り以外のもの)を、「彫り物」は和彫り(日本伝統の図柄のもの)を意味するものとする注意書きを付した。

興味 対象 1 におけるタトゥーも彫り物も経験がない者に対し、興味の程度について尋ねた。「1. まったく入れたいとは思わない」、「2. 入れたいとは思わない」、「3. 入れたいと思う」、「4. とても入れたいと思う」から選択するように求めた。

社会における受容の推測(受容推測) タトゥーと彫り物が、現在の日本社会でどのくらい受け入れられていると思っているか尋ねた。「1. まったく受け入れられていない」、「2. あまり受けいれられていない」、「3. ある程度受け入れられている」、「4. とても受け入れられている」から選択するように求めた。

周囲の人の経験数(他者経験数) 身近な人でタトゥーと彫り物を行った人が何人ぐらいいるか、記入するように求めた。

生ずる事象についての知識(知識) タトゥーや彫り物によって生じる日常生活における制限などについての知識を尋ねた。内容は、「病院で MRI 検査を受けることができない場合がある」、「温泉や海水浴場、プールなどに入れない場合がある」、「肝炎になりやすい」、「消そうと思ってもきれいに消せない」、「公共の場で肌を見せにくい」、「就職や出世で困ることがある」、「スポーツジムに入会できない場合がある」、「生命保険に入れない場合があ

る」である。それぞれの内容について、「知らなかった」または「知っていた」のあてはまる方を回答するように求めた[3]。なお、「就職や出世で困ることがある」、「スポーツジムに入会できない場合がある」、「生命保険に入れない場合がある」については、実施の都合上、対象 1 にのみ実施した。

結果

経験と種類

始めに、性別、年代別に経験の有無の割合について検討した。なお、対象 1 の母集団が出現率を分析するのに適しているのに対し、対象 2 の母集団はいれずみを入れている人達であることから、込みにして出現率を分析すると、不適切となってしまう。そのため、この分析については、対象 1 のデータのみで分析を行った[4]。

男女別に経験についてまとめたものを Table 1 に、年代別(10 歳刻み)に経験についてまとめたものを Table 2 に示す。全体としては、タトゥーを入れているのは 1.6%、彫り物を入れているのは 0.7%であった。性別と経験については、男性の方が女性よりもタトゥーを入れている者の割合が大きかった。しかし、クラメールの V は.019 (95%CL: .000-.044), $\chi^2(2, N=6438)=2.279$, ns であり, 性別と経験に有意な関連は認められなかった。年代と経験については、20 代と 30 代は、それよりも上の年代に比べ、タトゥーと彫り物の経験割合が大きかった。クラメールの V は.053 (95% CL: .038-.071), $\chi^2(6, N=6438)=36.642$, $p<.001$ であり、年代と経験にごく弱い関連が認められた。なお、既婚・未婚と経験の関連、および子どもの有無と経験についての関連についても検討したところ、両者とも無関連であった(それぞれ、クラメールの V は.004 (95%CL: .000-.025), $\chi^2(2, N=6438)=0.129$, ns およびクラメールの V は .013 (95%CL: .000-.038), $\chi^2(2, N=6438)=1.134$, ns)。

非経験者($N=6287$)における、興味の程度について確認した。興味についてまとめたものを Table 3 に示す。「入れたいと思う」および「とても入れたいと思う」をあわせて 2.29%であった。

Table 1 性別のいれずみ経験割合

	男性	女性	合計
入れていない	2998 (97.4)	3289 (97.9)	6287 (97.7)
タトゥー	57 (1.9)	47 (1.4)	104 (1.6)
彫り物	24 (0.8)	23 (0.7)	47 (0.7)
合計	3079 (100.0)	3359 (100.0)	6438 (100.0)

注) 括弧内はパーセンテージ。

Table 2 年齢別のいれずみ経験割合

	年代				
	20代	30代	40代	50代	合計
入れていない	1371 (96.8)	1590 (96.4)	1652 (98.1)	1674 (99.2)	6287 (97.7)
タトゥー	32 (2.3)	44 (2.7)	21 (1.2)	7 (0.4)	104 (1.6)
彫り物	13 (0.9)	16 (1.0)	11 (0.7)	7 (0.4)	47 (0.7)
合計	1416 (100.0)	1650 (100.0)	1684 (100.0)	1688 (100.0)	6438 (100.0)

注) 括弧内はパーセンテージ。

ここからは、対象 2 のデータも込みにした上で、タトゥーもしくは彫り物を入れている人達の特徴について検討する。

受容推測について、経験別にまとめたものを Table 4 に示す。タトゥーや彫り物を入れている者の方が、受容されているという回答が多く、特に、彫り物においてその傾向が認められた。クラメールの V は.093 (95% CL: .077-.111)、$\chi^2(6, N=6528)=113.903$, $p<.001$ であり、経験別と受容推測に弱い関連が認められた。

他者経験数について、経験別にまとめたものを Table 5 に示す。なお、回答で得られた人数は、「0 人」、「1～4 人」、「5～9 人」、「10～19 人」、「20 人以上」に集計している。Table 5 に示したとおり、タトゥーや彫り物を入れている者の方が、周囲の人の経験数が多いという回答が多く、特に、彫り物においてその傾向が認められた。クラメールの V は.204 (95%CL: .187-.221), $\chi^2(8, N=6438)=534.294$, $p<.001$ であり、経験別と受容推測に弱い関連が認められた。

知識について、経験別にまとめたものを Table 6 に示す。「病院で MRI 検査を受けることができない場合がある」、「肝炎になりやすい」において、χ^2 値は有意であり、クラメールの V が.1を超えていた。そして、タトゥーや彫り物を入れている者の方がそれらについて知っていることが示され、特に彫り物においてその傾向が認められた。

考察

本研究は、現代日本において、いれずみに関する諸内容について、その実態を明らかにすることを目的とした。

Table 3 いれずみを入れることへの興味

	n	%
まったく入れたいとは思わない	5673	90.23
入れたいとは思わない	470	7.48
入れたいと思う	121	1.92
とても入れたいと思う	23	0.37
合計	6287	100.00

注) 非経験者の回答

Table 4 社会におけるいれずみの受容の推測

	まったく受け入れられていない	あまり受け入れられていない	ある程度受け入れられている	とても受け入れられている	合計
入れていない	2425 (38.6)	3097 (49.3)	661 (10.5)	104 (1.7)	6287 (100.0)
タトゥー	29 (21.0)	62 (44.9)	26 (18.8)	12 (8.7)	138 (100.0)
彫り物	26 (23.2)	47 (42.0)	30 (26.8)	9 (8.0)	112 (100.0)
合計	2482 (38.0)	3211 (49.1)	718 (11.0)	126 (1.9)	6537 (100.0)

注）括弧内はパーセンテージ。

Table 5 周囲の人のいれずみ経験数

	0人	1～4人	5～9人	10～19人	20人以上	合計
入れていない	5417 (86.2)	787 (12.5)	46 (0.7)	29 (0.5)	8 (0.1)	6287 (100.0)
タトゥー	19 (16.8)	70 (61.9)	9 (8.0)	4 (3.5)	2 (1.8)	113 (100.0)
彫り物	16 (34.0)	23 (48.9)	3 (6.4)	3 (6.4)	2 (4.3)	47 (100.0)
合計	5453 (84.6)	887 (13.8)	58 (0.9)	37 (0.6)	12 (0.2)	6447 (100.0)

注）括弧内はパーセンテージ。

いれずみを入れている人と入れていない人の対比のみならず、タトゥーと彫り物を入れている人の対比も行いつつ、どのくらいの人が経験しているのか、どの程度許容されているのか、どの程度いれずみの特徴を理解しているかなどの内容について扱い検討した。

全体としては、タトゥーを入れている者の割合は 1.6%、彫り物を入れている者の割合は 0.7%であることが明らかになった。これは、関東弁護士会連合会(2014)や東京イセアクリニック(2017)の数値に近い値である。少なくとも現代の日本において、いれずみの経験者の割合は数パーセント程度であることが確認されたといえよう。

また、性差は確認されなかったが、年齢差についてはごく弱いものが確認された。若者が、ファッションとしていれずみを採用していることがうかがえる。若年層ほど経験している者が多いという傾向は、ピアス(田中・水津・大久保・鈴木, 2014)や美容整形(鈴木, 2017)[4]も同様であり、これら身体変工に共通の傾向といえるかもしれない。なお、アメリカにおいても、若年層においてタトゥーの経験割合が大きいことが知られている(The Harris Poll, 2016)。若年層にファッションとして身体変工が受け入れられ、ピアスやいれずみや美容整形といった身体変工が、個々人の選択によってファッションの一部として採用されるようになってきていることが推察される。

興味については、「入れたいと思う」および「とても入れたいと思う」をあわせて 2.29%であり、すでに入れている人と同じ程度の割合であった。もし、これらの者すべてが今後いれずみを入れた場合、経験の割合はおおよそ倍になる。今後、興味をもつ者が少しでも増えていけば、最終的には、入れる者の割合は次第に増加していくこともありうる。美容整形などの広まりと同様に、いれずみも今後広まっていく可能性は否定できない。アンタッチャブルともみなされているいれずみが、今後社会においてどのように扱われ、そして、個人が選択していくか、今後, ある程度の年月を追って検討していくことが、社会の中でのいれずみの位置づけを明確にするためには重要であろう。

社会における受容の推測については、タトゥーや彫り物を入れている者の方が、それらを受容されていると認識していることが明らかになった。鈴木(2017)においては、いれずみだけでなくピアスや美容整形などにおいても、経験している者の方が経験していない者よりも、その身体変工が受容されていると考えていることが示されている。受容されていると考えているからこそ、いれずみを入れようとしたり、実際に入れているものと推察される。このことから、社会におけるいれずみの受容という一種の規範に対する認識が、いれずみを入れるか否かに影響

Table 6 いれずみにより生ずる事象についての知識

	病院でMRI検査を受けることができない場合がある		温泉や海水浴場，プールなどに入れない場合がある		肝炎になりやすい		消そうと思ってもきれいに消せない	
	知らなかった	知っていた	知らなかった	知っていた	知らなかった	知っていた	知らなかった	知っていた
入れていない	4607	1680	662	5625	5015	1272	953	5334
	(73.3)	(26.7)	(10.5)	(89.5)	(79.8)	(20.2)	(15.2)	(84.8)
タトゥー	72	57	23	106	76	53	27	102
	(55.8)	(44.2)	(17.8)	(82.2)	(58.9)	(41.1)	(20.9)	(79.1)
彫り物	42	70	12	81	41	71	18	94
	(37.5)	(62.5)	(12.9)	(87.1)	(36.6)	(63.4)	(16.1)	(83.9)
合計	4721	1807	697	5812	5132	1396	998	5530
	(72.3)	(27.7)	(10.7)	(89.3)	(78.6)	(21.4)	(15.3)	(84.7)
	V=.116 (95% CL:.093-.141)		V=.038 (95% CL:.020-.063)		V=.153 (95% CL:.129-.177)		V=.023 (95% CL:.000-.048)	
	χ^2(2, N=6528)=88.27***		χ^2(2, N=6528)=9.34*		χ^2(2, N=6528)=152.31***		χ^2(2, N=6528)=3.31	

	公共の場で肌を見せにくい		就職や出世で困ることがある		スポーツジムに入会できない場合がある		生命保険に入れない場合がある	
	知らなかった	知っていた	知らなかった	知っていた	知らなかった	知っていた	知らなかった	知っていた
入れていない	865	5422	1331	4956	3201	3086	5305	982
	(13.8)	(86.2)	(21.2)	(78.8)	(50.9)	(49.1)	(84.4)	(15.6)
タトゥー	30	99	35	69	49	55	68	36
	(23.3)	(76.7)	(33.7)	(66.3)	(47.1)	(52.9)	(65.4)	(34.6)
彫り物	19	93	24	23	24	23	34	13
	(17.0)	(83.0)	(51.1)	(48.9)	(51.1)	(48.9)	(72.3)	(27.7)
合計	914	5614	1390	5048	3274	3164	5407	1031
	(14.0)	(86.0)	(21.6)	(78.4)	(50.9)	(49.1)	(84.0)	(16.0)
	V=.040 (95% CL:.021-.065)		V=.072 (95% CL:.050-.097)		V=.010 (95% CL:.000-.034)		V=.071 (95% CL:.048-.096)	
	χ^2(2, N=6528)=10.30**		χ^2(2, N=6438)=33.71***		χ^2(2, N=6438)=0.59		χ^2(2, N=6438)=32.22***	

注）括弧内はパーセンテージ。

していることが示唆されたといえよう。いれずみが、装いの 1 つとして、社会とのすりあわせのうえで選択されていることの 1 つの証左にもなったと考えられる。

周囲の人の経験数については、タトゥーや彫り物を入れている者の方が、多い人数を報告しており、その周囲にいれずみ経験者が多いことが示された。美容整形について扱った鈴木(2017)においても、同様に、経験者は周囲の経験者の人数を多いと認識していることが示されている。周囲の人から、いれずみを入れた話を聞いたり、その入れたいれずみを実際に見たりすることにより、刺激を受けて本人がいれずみを入れた可能性、逆に、いれずみを入れた後に、周囲の人が影響を受けていれずみを入れた可能性の両方の可能性がある。少なくとも、いれずみや美容整形などの、経験割合が相対的に少ない特殊な装いにおいても、装いの選択における他者の影響の存在が確認されたといえる。

生じる事象についての知識については、興味深い知見が得られたといえる。いれずみを入れている人の方が「知らない」と回答した割合の多い内容は存在しなかった。むしろ、生命や健康に関するいくつかの内容においては、いれずみを入れている者の方が、当該知識を有する割合が大きかった。このことから、いれずみを入れた者は、必ずしも、衝動的に事前の十分な検討がないままに、いれずみを身体に入れているわけではないということが示唆される。

とはいえ、生命や健康に関連しない対人的対社会的内容については、いれずみを入れているか入れていないかによって、回答が異ならなかった。つまり、現時点での社会的規範、また、社会からの受容の程度に重きを置かない態度の存在が示唆された。これは、先の社会における受容の程度で得られた内容とも関連してくる。身体変工の 1 つであるピアスにおいては、過剰なピアスが社会に受け入れられていないという認識を、実施者本人が有していることが報告されている(大久保・井筒・鈴木, 2011)。同じ身体変工であっても、両者にはこのような差異が認められるのは興味深い。これは、それぞれの装いの受容の程度、また、基本的な情報の流布の程度などが影響している可能性がある。

ともあれ、いれずみを入れる者は、いれずみが身体に及ぼす影響については多少理解してはいるが、周りにいれずみを入れている人が多い、もしくは多いと見積もっているために、いれずみを社会から受容されていると思い、対人的対社会的な制約を意識せずにいることがうかがえる。

今後、いれずみという装いは、社会においてどのように位置づけられていくのであろうか。例えば、ピアスであれば、日本において、髪の脱色とともに反抗や不良の印として認識されていた時代もあるが、現在では、比較的一般的なおしゃれの 1 つとして認識されている。今後、いれずみも、ピアスと同様の受容のプロセスをたどる可能性はある。しかし、アンダーグランドとしての装いとして扱われ続ける可能性もある。社会におけるいれずみへの態度

の変容には、いれずみを入れている側のふるまいも重要である。いれずみが受け入れられるには、社会においていれずみがどのように認識されているかを理解した上で、入れた後のふるまいに気をつけていく必要もあろう。

少なくとも、今回の調査により、いれずみという装いを、人々がこの社会の中でどのように受け止め、場合によっては採用し、社会に臨んでいるのか、その一端を明らかにすることができたと考えられる。

それでは、いれずみを入れた人の背景にある心的プロセスにはどのような要因が存在し、影響し合っているのであろうか。この点については今後、いれずみ経験者を対象に検討を進めていくことによって、明確になっていくことが期待される。今回の調査において扱った内容は、一部を除き、タトゥーまたは彫り物を入れた人における差異が明確にはならなかった。しかし、心的プロセスにおいては、両者の差異が確認され、それぞれの特徴が明確になる可能性もある。装いの中でいれずみがどのように位置づけられて、そして、選択されていくのか、それが社会の中で、どのように影響を受け、そして影響を与えていくのか、装いの 1 つと位置づけた上で明らかにしていくことにより、人の外見についての意識と装う意義が明らかになっていくといえる。

なお、装いにはそもそも文化差があり、そして，いれずみにおいてもそれは同様である。そのため、異なる文化圏でのいれずみに対する態度の違いが、問題を生じさせる可能性はある。実際、アイヌ関連の講習会のために来日したマオリ族の女性が、公共の入浴施設において入場を断られ、内閣官房長官がそれに対する記者会見を開く事態となった。今後、世界中から日本への観光客は増え、また、移住してくる者も増える可能性がある。そのような状況において、いれずみという装いの理解は対人関係や営業上において重要であり、また、いれずみをとおした異文化の理解が大切になってくるといえる。

2020 年の東京オリンピック開催に向け、外国人観光客を誘致する活動が行われているが、いれずみを入れた外国人観光客に対する対応に苦慮している施設もある。肌を見せる機会が生じる入浴施設を有するホテルや旅館などにおいて、特にそれは問題となってくる。いれずみをはじめとし、種々の装いは、社会とのすりあわせの上で意味が付与され、そして採用されていく。現在の日本において、人々がどのようにいれずみを捉え、そして、場合によっては受け入れていくのか、そこには適切な現状理解が欠かせない。本研究がその現状理解の一助になることを期待する。

引用文献

大久保 智生・井筒 芽衣・鈴木 公啓 (2011). PAC 分析を用いた青年のピアッシングへの意味づけへの質的検討－身体装飾としてのピアスに関する研究(2)－ 繊維製品消費科学, *52*, 121-128.

大阪市 (2015). 職員の入れ墨調査について 大阪市 Retrieved from http://www.city.osaka.lg.jp/jinji/page/0000175974.html (2017 年 10 月 27 日)

観光庁 (2015). 入れ墨(タトゥー)がある方に対する入浴可否のアンケート結果について Retrieved from http://www.mlit.go.jp/kankocho/topics05_000160.html (2017 年 12 月 15 日)

関東弁護士会連合会 (2014). 平成 26 年度関東弁護士会連合会シンポジウム 自己決定権と現代社会－イレズミ規制のあり方をめぐって－ 関東弁護士会連合会

Laumann, A. E., & Derick, A. J. (2006). Tattoos and body piercings in the United States: A national data set. *Journal of the American Academy of Dermatology*, *55*, 413-421.

Pew research center (2010). Millennials: Confident. Connected. Open to Change. Pew research center.

鈴木 公啓 (2017). 美容医療 (美容整形およびプチ整形)に対する態度－経験の有無や興味の程度による比較－ 東京未来大学研究紀要, *11*, 119-129.

田中 孝・水津 幸恵・大久保 智生・鈴木 公啓 (2014). 身体装飾としてのピアス・いれずみの実態とそのイメージの検討－賞賛獲得欲求と拒否回避欲求との関連から－ 香川大学教育学部研究報告第 I 部, *142*, 53-62.

田中 香涯 [5] (1940). 医事雑考, 妖。異。変 風鳴堂書店

The Harris Poll (2016). Tattoo takeover: Three in ten Americans have tattoos, and most don't stop at just one. The Harris Poll.

東京イセアクリニック (2017). 入れ墨・タトゥーへの認識・イメージに関するアンケート調査 東京イセアクリニック

山本 芳美 (2005). イレズミの世界 河出書房新社

山本 芳美 (2016). イレズミと日本人 平凡社

吉岡 郁夫 (1996). いれずみ(文身)の人類学 雄山閣出版

註

1) なお、入浴の可否については、「お断りしている」が 56%、「お断りしていない」が 31%、「条件付き(シール等で隠す)」が 13%である。

2) タトゥーといれずみの両方を入れる者は、きわめてまれではあるが皆無ではない。ただし、無効回答との判別ができなかったこともあり、後の分析における明瞭さも考慮し、両方入れていると回答した 9 名のデータは除外している。

3) 対象 2 に対する調査実施の際には、選択肢は「入れる前から知っていた」、「入れた後に知った」、「今まで知らなかった」であったが、ここでは、web 調査の回答様式にあわせ、「入れる前から知っていた」と「入れた後に知った」を「知っていた」に、「今まで知らなかった」を「知らなかった」として集計し直している。

4) 鈴木(2017)は、美容整形の実態および態度などについて検討した研究であるが、他の身体変工であるピアッシングや

いれずみについてもその経験割合などを扱っている。そして、10 代後半から 60 代の男女約 21,000 人において、タトゥーの経験割合は 2.73%、彫り物の経験割合は 1.96 であることなどが報告されている。

5) 奥付は「田中祐吉」と記されている。

Actual condition of tattoo experience and characteristics of experienced person

Tomohiro SUZUKI *(Tokyo Future University)*
Tomoo Okubo *(Kagawa University)*

This research aimed to clarify the actual condition of tattoo experience in Japan and the characteristics of experienced persons in comparison to non-experienced persons. In this research, below aspects were dealt and investigated: How many people experiencing in tattooing, the extent to which people are interested in tattooing, how much tattooing is accepted, how many acquaintances are experiencing in tattooing, and how much people know the feature of the results of tattooing. A survey was conducted on about 6,500 subjects to clarify the actual condition of tattoo experience. In addition, the tattoo experienced persons extracted that sample and other 90 tattoo experienced persons were compared to non-experienced persons for clarifying the characteristics of tattoo experienced persons. As a result, there are few experienced tattoos, and tattoo experienced persons know the influence of the tattoo on the body. Furthermore, it is considered that because they think that there are many tattoo experienced persons in the surroundings, tattoo experienced persons thought that tattooing was accepted by society, and they did tattooing without being conscious of interpersonal and social restriction.

Keywords: tattooing, adornment, actual condition, attitudes, knowledge.